

# 俳諧師西鶴の手法

——『西鶴諸国ばなし』東大寺・興福寺の「太鼓」をめぐる——

森 田 雅 也

## 一、はじめに

『西鶴諸国ばなし』〔貞享二（一六八五）年刊。五卷五冊、三十五話〕序文は、

世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ。熊野の奥には、湯の中にひれふる魚あり。筑前の国には、ひとつをさし荷ひの大蕪あり。豊後の大竹は手桶となり、若狭の国に二百余歳の白比丘尼の住めり。近江の堅田に、七尺五寸の大女房もあり。丹波に一丈二尺の乾鮭の宮あり。松前に百間つづきの荒和布あり。阿波の鳴門に、童女のかげ硯あり。加賀の白山に、えんま王の巾着もあり。信濃の寢覚の床に、浦島が火うち筥あり。鎌倉に頼朝のこづかひ帳あり。都の嵯峨に、四十一まで大振袖の女あり。これをおもふに、人はばけもの、世にない物はなし。

とし、各話とも怪奇・奇談話をあげている。

ところがその巻頭を飾るべき巻一の一「公事は破らずに勝つ」には、奇談も怪談も出てこない。以下梗概を述べる。

幸若舞の『大織冠』謡曲の『海土』などにあるように、古代、藤原鎌足が讃岐国房崎にて面向不背の珠を取り戻すために都より楽人を呼び寄せて管弦の催しを行ったが、その折に用いた「唐太鼓」が二つ残された。一つは南都東大寺におさめ、もう一つは西大寺にわたり、その後、西本願寺に保管されている。東大寺の太鼓は、そのまま大切に保管されていたが、同じく南都の興福寺では、毎年の法事に東大寺のこの太鼓が必要であったために借用しなくてはならなかった。ある年、東大寺がその太鼓を貸してくれないと言うので、法事に支障をきたす事態となった。そこで、興福寺の衆徒、春日大社の神主までが口添えして、ようやく借りて何とか仏事を済ますことができた。ところが、興福寺は仏事後、東大寺よりの催促も無視して太鼓を返却しなかった。興福寺では全山あげて、毎年借用してきたにもかかわらず、今年だけ拒否するとは許せないとして報復措置を講じようとしていたのである。太鼓を壊すなどの過激な案が出る中、学頭の老法師が一計を案じ、太鼓の革を剥がし、胴の中にある「東大寺」の書付を削り、もう一度、そこに新しく「東大寺」と書きつけて返却することとした。翌年、興福寺は右の法事の際、東大寺に使者を立て、「そちらに貸している当方の太鼓を返してもらいたい」と口上を述べさせたが、東大寺の衆徒たちに暴力をふるわれた。この件を持って、興福寺は奉行所に訴えたところ、太鼓の内側に新しい文字で「東大寺」と書かれていることを確認した。奉行の裁きは「たとえ、これが興福寺の仕業であっても元々の書付がわからない。よって、これからは太鼓の所有者は興福寺として、保管場所は今まで通り東大寺とすること」とし、興福寺は太鼓が必要な時はいつでも東大寺から取り出せることとなった。

西鶴の浮世草子はすべて短編からなっており、そのいずれにも西鶴は章題を付している。かつては森銑三氏、中村幸彦氏などが西鶴単独作品に疑義を唱えられたが、宮沢照恵氏は『西鶴諸国ばなし』の版下は西鶴自画自筆であるという前提から、その版行書誌調査を行っている<sup>1)</sup>。他の作品についても遺稿を除き、西鶴自身の手になると考えてよ

かろうが、それだけに各章題はよく内容を言い表している。『西鶴諸国ばなし』の全話も同様である。

この話の場合、「公事（裁判）」と「勝つ」は興福寺側勝訴を指し、「破らず」は興福寺の集会で

「数年借し来つて、今、この時もに至り、憎きしかたなり。只はかへさじ。打ちやぶつて」といふ者あれば、

「それも手ぬるし、飛火野にて焼け」（傍点は森田 以下同）

と東大寺の仕様に憤って叫んだ際の「若僧・悪僧」の「破る」という過激な行動を押さえた上で勝訴に持ち込めたということになる。

さらに『西鶴諸国ばなし』の目次にあたる目録には各章の眼目が記されている。巻二の二「十式人の俄坊主」なら「遊興」、巻四の二「忍び扇の長歌」なら「恋」というようである。そうすると巻一の一、巻頭章の眼目は「知恵」とならざるを得ない。

右の裁判は果たして、学頭の老法師、あるいは奉行の「知恵」をたたえる話なのであろうか。大きな疑問を持つ。先行研究も太鼓の所有者を示す古くからある内側の「東大寺」の文字を消して、新しく再び「東大寺」と書く事で所有権を得た老法師の「悪知恵」とも言える仕掛けに注視したものが多い<sup>(2)</sup>。

かつて拙稿では、

この太鼓の所有権をめぐる、興福寺と東大寺の僧たちが熱くなる様は尋常ではない。天下の学僧が熱くなることだけでも異様であるのに、範を示すべき興福寺の学頭である老僧の知恵は、両者を円く納めるためのものではなく、興福寺側の所有権を有利にするための狡猾な知恵であることに一驚する。すなわち、ここに描かれる僧たちは世俗と変わらぬエゴイストたちなのである。学僧の暴れることは、古典における「山」「寺」において確認するところではある。しかし殊更、『西鶴諸国ばなし』の冒頭を飾った理由は、「ばけもの」に対峙するはずの「僧侶」というコードの組み替え、すなわち、怪異ではない万人を「ばけもの」とする読みにつながる

るものと理解すべきである。

と『西鶴諸国ばなし』の「人はげけもの」論の枠組みで論じた<sup>(3)</sup>が、それだけで『西鶴諸国ばなし』「巻頭」を飾るにふさわしいのであろうか。西鶴は来歴から「俳諧師」である。俳諧において「巻頭」は特別な用語である。意識しないはずがない。

一方、老法師より奉行の「知恵」をたたえるのは無理があるうか。後述するようにその判決は公平さに欠けるものの、両寺院の物理的紛争を防いだという点では「知恵」ある評決であったと言えるかも知れない。さらには古典文学における比事物（裁判物）としては、西鶴に京都を舞台とした傑作『本朝桜陰比事』〔元禄二（一六八九）年刊。五卷五冊、四十四話〕があるので、巻一の一はその先駆けとも考えられようが、そのように整理すると『西鶴諸国ばなし』の「巻頭」としての作品としての統一性は破綻してしまうことになる。

以上のような問題点を含めて、本論では当時の民衆、西鶴作品の受容者側（読者）からの読みと作家西鶴の意図を再考察したい。

なお、本論考で「奈良」としている場合は、奈良に続いて



『西鶴諸国ばなし』巻1の1 挿絵  
 (『日本古典文学全集 井原西鶴(2)』(小学館)より)

地域名を付す場合を除いて、近世の「奈良町」を指す。「奈良町」の定義は所領の変遷があるので決め難いが、『日本歴史地名大系』の立項に従い「現奈良市の中心部、興福寺・東大寺・元興寺・春日社などを中心に発展した町」としたい。

## 二、東大寺と興福寺の抗争―交錯する「日常化」と「非日常化」―

両寺の対立の歴史は根深いものがある。ともに八世紀、鎮護国家の象徴として、いわば国立の寺院として建立された東大寺と、興福寺は藤原氏の菩提寺として建立された私立の寺院である。創成期の奈良時代を過ぎ、平安時代になると東大寺は相次いで倒壊、雷火、火災にみまわれたのに対し、興福寺は藤原氏の繁栄とともに勢力を拡大し、大和一国をほぼ支配するほどまでになっていく。だが、藤原氏支配が終わった治承四年、平家による南都焼き討ちによって焼失する。鎌倉時代になると両寺ともに朝廷・幕府に取り入り、伽藍が再興され、教学復興の機運が高まったが、天竺様の大仏殿や南大門仁王像などの派手な復興状況からは東大寺の方がやや優位になったといえるかも知れない。一方、興福寺の勢力も衰えず、南北朝・室町時代を迎えることとなる。両寺とも多くの僧兵を抱えながら、源頼朝自らが乗り出した復興事業に恩義を覚え、承久の乱では幕府側についたことから、鎌倉・室町時代も幕府との密接な関係を怠らず、奈良の二大勢力として君臨した。

しかし、そのような両寺勢力の拮抗の歴史の中で、最大の事件は、文安四（一四四七）年の抗争事件と言える。西尾知己氏<sup>(4)</sup>によれば

文安四年九月初旬、春日社造宮棟別銭の賦課方法をめぐる東大寺・興福寺の対立が表面化した。東大寺学侶は寺中の門戸を閉じ、要害を構えて軍勢を置く一方、興福寺も東大寺側が要害を築く際に興福寺内の竹木を切り

扱ったとして大軍を奈良に招集した。事態を重く見た公武政権では、南都伝奏の万里小路時房や幕府の両寺担当奉行が両寺の別当や学侶の雑掌を通じて調停を試みた。しかし努力もむなしく、十三日に興福寺が東大寺に発向した。その結果、東大寺側では多数が討死したほか、僧房も破却され、生き残った学侶は南山城に逃れた。公武政権では、興福寺に東大寺郷への課役賦課の自重を求める一方、東大寺学侶には帰寺を促したが、東大寺学侶が示した帰住条件に対する興福寺側の反応は鈍く、東大寺学侶は帰住の機会を作れないまま、寺内不在が長期化していくことになった。以上が『建内記』『経覚私要鈔』からわかる事件の概要である。

と事件の経緯を述べ、さらにこの事件の重要な論点として、

①争点としての東大寺郷の支配。

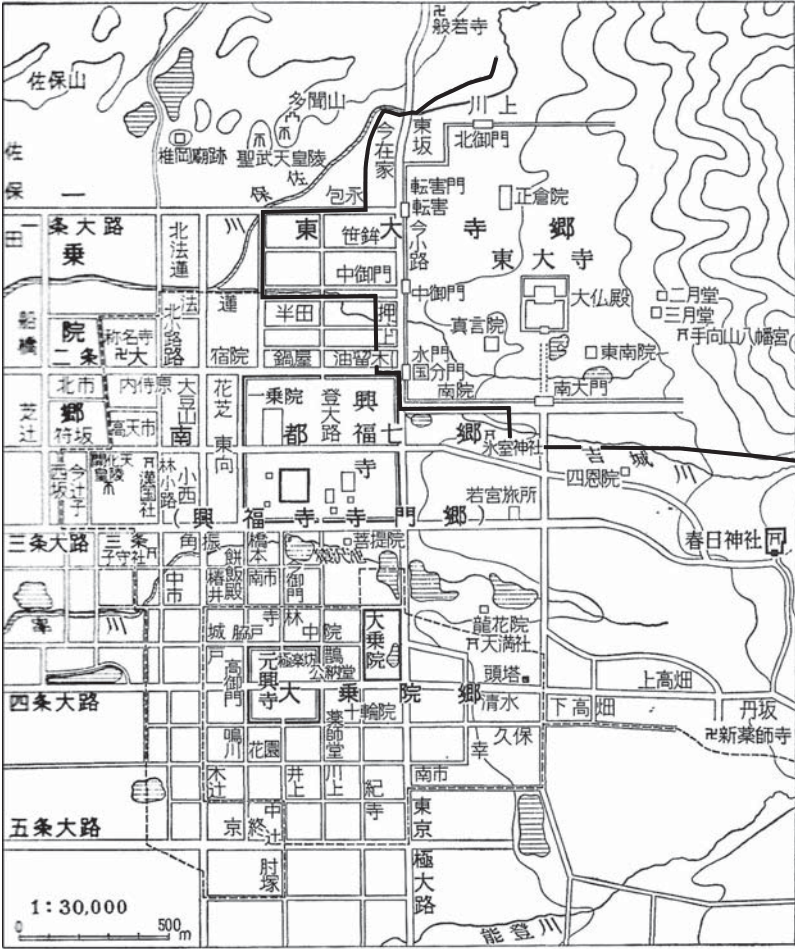
②東大寺学侶の強硬姿勢とその背後にある室町殿足利義教の存在。

③興福寺側で東大寺攻撃を主導する学侶・六方衆（中世興福寺の僧兵）の存在。

をあげている。

奈良の人々にとって、右のような事件の背景はあまり関心がない。東大寺側の強行な姿勢とそれを庇護しようとした室町幕府第六代將軍足利義教の嘉吉の乱（嘉吉元（一四四一）年）での死によって両寺の均衡が崩れたぐらいの事情は知りえたかも知れないが、二大勢力である両寺の僧侶が奈良の町中で多数の死者を出し、その抗争は治まりを見せず今も続いているという事実は根深く心の底に刻まれ続けたのではなからうか。

徳川幕府の世になったといっても、凶工のように両寺院の寺領は隣接し、中には入れ込む場合もあった。巻一の一の話でも太鼓を返して欲しいという興福寺からの使者を東大寺の衆徒が「打擲」するが、このような両寺間における暴力を含む大小の衝突は「日常化」していたのではなからうか。極端に言えば、奈良の名物として地元の人々には諦念観をもって受け入れられ定着していたと考えられる。



図I 隣接する「東大寺郷」と「興福寺寺門郷」

永島福太郎『奈良』（吉川弘文館）1963年刊。p171「南都諸郷図」より

そのような「日常化」した奈良の名刹東大寺と興福寺の抗争を、生駒山を一山越えただけの京都や大坂の人々は小耳にはさむ事はあっても噂程度にもなっておらず、戯作にも書かれることは殆んどなかったのである。あくまで奈良は神々しい信仰の対象の地であり、「天下の台所」として商業が栄える大坂や古来からの都として栄える京都からは地理的にも行政的にも一線を画した場所であったのである。ましてや遠方の旅人にとって予測のつかない両寺の対立であった。当時の『西鶴諸国ばなし』の多くの読者たちは、奈良を代表する名刹の両寺院の「非日常化」と言える特異な事件の経緯を衝撃的な大きな驚きの中で読んだのではあるまいか。

先に挙げた『西鶴諸国ばなし』の序文の構成を考えれば、

「熊野の」以下は四段落に別れている。まず、第一段落は「熊野の奥には、湯の中にひれふる魚有。筑前の国には、ひとつをさし荷ひの大蕪有。豊後の大竹は手桶となり」まで。この三つのはなしの種は現実にはあるが、狭い世界しか知らない人には知り得ない奇談。第二段落は「わかさの国に式百余歳のしろびくにのすめり。近江の堅田に、七尺五寸の大女房も有。」まで。この二つのはなしの種は誇張はあるものの全く否定はされない奇談。第三段落は「丹波に一丈式尺のから鮭の宮あり。松前に百間つゞきの荒和布有。」まで。この二つのはなしの種は全くの誇張で、非現実的な奇談。第四段落は「阿波の鳴門に、童女のかけ硯あり。加賀のしら山に、ゑんまわうの巾着もあり。信濃の寢覚の床に、浦嶋が火うち筥あり。かまくらに頼朝のこづかひ帳有。」まで。この四つのはなしの種は俳諧の手法による、連想の世界であって、誇張を越えた空想の奇談。この四段落による分類こそが「はなしの種」として、『西鶴諸国はなし』の奇談性を形成している基本的な基調の標榜となっているのである。<sup>(5)</sup>

卷一の一の場合もまさに奈良を知らない読者にとつては「非日常」の両奈良の両名刹のゆゆしき抗争なのである。まさしく「俳諧師西鶴」は、右の序文の「狭い世界しか知らない人には知り得ない奇談」として『西鶴諸国ばなし』の

「巻頭」に据え、作品全体の「色付」に成功しているのである。

だが一方で、奈良に住む人々にとっては「日常」の一齣に過ぎないのである。

知らぬ人を嘲弄し、知る連衆のみで滑稽を共有し、その様を世間に披露し、供覧することもまた、俳諧の手法と言つてもよからう。西鶴は俳諧師としての手法を存分に生かしているのである。

もつとも、西鶴（一六四二〜九三年）が文筆家として活躍した頃、奈良東大寺の姿は聖武天皇の昔からは較ぶべきもなかった。何よりも大仏殿は永禄十（一五六七）年の三好三人衆と松永久秀の騒乱で焼失したまま、大仏も慶長十五（一六一〇）年に仮堂が倒壊し露座のままであった。芭蕉（一六四四〜九四年）は貞享二（一六八五）年二月、『野ざらし紀行』で奈良興福寺の薪能、東大寺の二月堂の「お水取り」を見物しているが、奈良東大寺には悲しい思いを抱いたのであろう。次の二句を残している。

初雪や いつ大仏の 柱立（真蹟懷紙、支考編『笈日記』）

雪悲し いつ大仏の 瓦葺（万菊丸宛書簡、其角著『花摘』）

これに対し、西鶴の頃の興福寺の隆盛は東大寺をはるかに上回っていた。徳川政権の寺社政策は豊臣政権にならい、寺社の活動を宗教的・文化的なものに限定するとともに、政治的なかかわりを一切認めないものであった。そして、寺社の宗教的・文化的活動を保障するために、一定の所領（朱印領）を与えて経済的基盤を安定させた<sup>6)</sup>。ちなみに十七世紀初期の朱印領は東大寺が二千二百一十一石であったのに対し、興福寺は春日大社領も含め、二万七千八百三十四石であり、両者の均衡は大きく崩れていたと言える。東大寺はこの少ない石高で数多くの法会の運営や大仏殿の再建準備などを行いつつ、広大な伽藍の維持を行っていたのである。しかも寛文七（一六六七）年には、治承四（一一八〇）年の平重衡による南都焼き討ち、先の永禄の兵火も免れた二月堂が焼失していた。創建以来の支柱を失つてしまったのである。

しかし、二月堂の再建は幕府主導で行われたため、わずか二年後の寛文九（一六六九）年には再建された。西鶴作品に多く「二月堂」が登場し、芭蕉が訪れたのも即時性があつたためであろう。ただ、大仏殿修復は遅れるままであつたが、ようやく公慶上人（一六四八〜一七〇五年）らの勧進活動により、貞享元（一六八四）年、幕府から許可を得て勧進を始めた。ようやく元禄五（一六九二）年には大仏修復がなり、宝永二（一七〇五）年には、大仏殿の上棟式が行われている<sup>(7)</sup>が西鶴・芭蕉が生前、見るには間に合わなかつた。

もちろん、興福寺と言えば江戸時代の大火で多くの伽藍を失つたことで有名であるが、それは享保二（一七一七）年のことである。一月四日に金堂・講堂・僧房・西金堂・南円堂・中門・南大門を焼失<sup>(8)</sup>していることから、十八世紀になると、逆に興福寺の姿は大仏殿が再建された東大寺の威容には叶わなかつたといえるのである。

### 二、名裁きの行方

この話の顛末の典拠について『日本古典文学全集』の頭注は

興福寺維摩会に用いる五獅子の如意は東大寺に蔵されていたが、両寺院間に事件があつた時、東大寺がこれを出さなかつたので法事に支障をきたし、衆徒がこれを朝廷に奏上し、東大寺に勅があつて、如意を出させ、法事を行う。永仁三（一二九五）年の事件である。この如意は表は三鈷杵<sup>（しょうぎょう）</sup>を、裏は五獅子を彫る（塵添搥囊抄十九）。挿絵の太鼓に獅子の絵が描かれているのは右の事件を素材にしたことを暗示する。<sup>(9)</sup>としてゐる。

「如意」とは説法・法会において講師が手に持つ儀礼用の威儀具の事で、僧尼が背中をかく日常用具で孫の手のような杖状の物である。唐太鼓ではない。この「五獅子如意」は、今も東大寺の宝物として保管されており、重要文化

財に指定されている<sup>(10)</sup>。

さて、その「維摩会（ゆいまえ）」は、興福寺の場合、毎年十月上旬と定められていた。

この法会は藤原鎌足の追善のため藤原不比等が十月十日を期して行われた。そして論義法要といって、南都の学僧たちが、自分の平常の学問研究―主として仏教教学―の成果を天下に披露する法会である。<sup>(11)</sup>

この「維摩会」は近世においても奈良町の年中行事であったが、右のような事件が当時の民衆の脳裏に残り、伝承化されていた可能性は指摘できるかも知れない。

ところで、『西鶴諸国ばなし』巻一の一の両寺院に対する裁定は、一見すれば、江戸時代の喧嘩両成敗の慣例から見事な裁きと言える。しかし、東大寺側にしてみれば、まったく太鼓の縁起に関係のなかった興福寺に所有権を奪われたのであるから、不公平な裁きとして腹立たしさは納まらなかつたであろう。

そうすると、この裁きは先に述べた朱印領の格差による力の差に起因した結果であつたのであろうか。

裁き主は「奈良奉行」となるが、徳川政権下初期には問題を抱えていた。『奈良市史』には、

奈良奉行職の始原は慶長十八（一六一三）年に任命された中坊飛驒守秀政に求めるべきであり、これによって奈良町は、堺・長崎などと同列に並ぶ遠国奉行配置の町に列したのであろう。ただし『寛政重修諸家譜』や『徳川実紀』には、秀政の父秀祐がすでに奈良の奉行になつたと記され、慶長十四（一六〇九）年に秀政が父の原職について奈良奉行になり、近江・大和の幕領を支配したとみえている。中坊氏はもともと大和の土豪で、筒井氏に属し、筒井氏が伊賀に移されるとその家老職についていた。ところが、関ヶ原の戦後秀祐は大久保長安に接近し、吉野郡に三五〇〇石を与えられ、大和・近江の幕領代官を勤め、やがて南都のことに関与するようになった。その理由は、中坊氏が代々興福寺の衆徒として、春日社の造営や神事を奉行していた家柄で、秀祐もまたその実績をもっていたからであろう。南都は春日社・興福寺の諸行事がとくに重要な位置を

占める、という特別な町であり、その支配にはこのことをよく処理し得る人物を長安が必要としたからだと考えられる。そして秀祐の跡をついだ秀政も長安を助け、慶長十八年長安没後、正式に奈良奉行となったのである<sup>22</sup>。

とある。つまり、正式な初代奈良奉行職は「中坊秀政」「任期・慶長十八（一六一三）年八月〜寛永十五（一六三八）年八月」であるが、実質その父「中坊秀祐」の時代から奈良奉行として奈良を治めていたとするのである。この父子の奈良町支配は関ヶ原の戦い以前からの長期のものであるとする。ちなみに二代目奈良町奉行は「中坊長兵衛」「任期・寛永十五（一六三八）年十一月〜寛文三（一六六三）年十月」であったため、「中坊氏」による徳川政権での奈良奉行職は実に、六十年以上の長きにわたったということになる。

その「中坊氏」は「代々興福寺の衆徒として、春日社の造営や神事を奉行していた家柄」であったのである。ではなぜ、「中坊氏」でなければならなかったかというと、「南都は春日社・興福寺の諸行事がとくに重要な位置を占めるという特別な町であり、その支配にはこのことをよく処理し得る人物」でなければならなかったからである。

江戸時代の奈良町の主な年中行事は「表Ⅰ」であげたので参考にされたい。そのほとんどが興福寺・東大寺・春日大社の宗教行事であることが一目瞭然である。土、日、祝日のない時代、奈良町のカレンダーもこれらの年中行事に連動していたであろう。宗教上の理由も含め、例え一つの行事でもおろそかにできなかつたのである。

そう考えれば、奈良奉行の責務として、興福寺の法事に支障が出るとなると、一大事となる。「知恵」をふり絞り、かかる裁きによって、両寺院の騒動をおさめ、行事を恙無く行つたのであるから、この話の眼目「知恵」は奉行の手柄として讃えられているのかも知れない。ただ、そうすると、『日本古典文学全集』頭注の「この話は裁判話として、西鶴の作品としては、裁判小説『本朝桜陰比事』に接続する。」という結論となってしまう。然れば先にあげたように、『西鶴諸国ばなし』の「巻頭」を飾る奇談としての伝奇性は希薄なテーマとなってしまうのである。

〔表Ⅰ〕奈良町の主な年中行事（『奈良市史』p229より）

俳諧師西鶴の手法	正月元旦	江戸年頭御礼 春日社参詣はじめ	7月14日	押上町八阪神社祇園会
	2日	町中年頭礼	24日	地藏祭
	3日	奉行所御礼	8月1日	八朔御礼
	丑の日	若草山放火	10日	天満天神祭
	5日	南市・北市・高天市初戎	22日	紀寺村天王社祭
	14日	町方参会	9月1日	氷室社例祭
	15日	とんど 興福寺心経会	2日	鏡明神祭礼
	15日夜～16日	蜂起はじめ	3日	東大寺八幡宮祭礼
	14日～18日	興福寺牛王の加持	9日	佐保田天神祭礼
	二の申日	春日社お田植神事	12～13日	御霊社祭礼
	2月1～14日	二月堂お水取り	17日	初宮明神祭礼
	7～14日	薪能	19日	手力雄神宮祭礼
	申の日	春日社申祭	10月上旬	鹿の角伐り
	15日	興福寺常楽会	10～16日	興福寺維摩会
	3月5日	東大寺華厳会	16日	興福寺法華会
	25日	般若寺文殊会	11月上旬の申日	春日祭
	4月1日	興福寺観禪院三十講	26日	春日若宮祭
	4～5日 (2～3日)	水屋社祭礼	27日	後日能
	8日	興福寺仏生会	12月8日	大仏煤払い
	5月2日	東大寺 聖武天皇御齋会	16日	良弁忌
	6月18日	東大寺戒壇院 千手観音懺法の日	31日	三月堂方広会 庭竈
	晦日	町方茅輪祓		

そもそも『西鶴諸国ばなし』巻一の一は、太鼓の貸借をめぐって起こった東大寺の態度への興福寺の意趣返しが発端である。両太鼓の所有権の争いではない。唐太鼓の縁起に関係のなかった興福寺に所有権を与え、東大寺の所有権を取り上げ、保管場所とだけするという裁きが事実なら、とても興福寺側に利のある不公平な裁定である。

この時の奈良奉行職を「中坊氏」であったと仮定すれば、「中坊氏」の一族は「代々興福寺の衆徒」であったのだから、身内輩員したとしても不思議はない。

ただ、例え、「元衆徒」であっても奉行職たる者、そのような裁きは赦されたのであるうか。先に挙げた『奈良市史』は、「中坊氏」のその後について書いている。

慶長十八（一六一三）年以来、父子二代奈良奉行を勤めてきた中坊氏は、さきにも述べたように、奈良町寺社勢力

と深い関係を持っていた。従って幕藩制成立期の奈良町支配には、中坊氏の存在はむしろ歓迎すべきことであったであろうが、幕府による統一的な全国支配が進むにつれて、このことはむしろ障害になってきたのではなからうか。

寛文三（一六六三）年十月、奈良奉行中坊時祐は老齡（七十三歳）を理由に奉行職を辞した。その年齢からみて決して不自然なことではないが、奈良町寺社勢力の側では、「当国之所職代廿余年サハキ被申候也（中略）久々ナシミト申残多候事、江戸より上付替おとかし由也」（『官符衆徒引付』）とその辞任を惜しみ、また将来への不安を書きしるしている。<sup>13)</sup>

つまり、「中坊時祐」は突然、奉行職を辞したのである。その辞職を惜しんだとされる『官符衆徒引付』とは興福寺の記録書である。興福寺としては、奈良町支配の最大の興福寺支援者を失くしてしまったのである。というよりも三代目奈良奉行として送り込まれたのは、旗本土屋忠次郎利次〔任期・寛文四（一六六四）年四月〜寛文九（一六六九）年十一月〕であったが問題はそこに生じた。さらに『奈良市史』は綴っている。

奈良町寺社勢力との個人的つながりをもたない幕府官僚の土屋利次は、就任以来町火消役新設問題（寛文六年）・薪能縄張事件（同年）・春日神鹿殺傷事件（同八年）など相次いで奈良町寺社勢力との間に摩擦を引きおこした。中坊時祐辞任にあたって、奈良町寺社勢力がおぼろげに感じた不安は現実のものとなったのである。

土屋自身は寛文九（一六六九）年十一月、春日社遷宮奉行問題にかかわって失脚しているが、寛文年間（一六六一〜七二）の上方支配体制再編成のなかで、奈良町支配も変質していかねばならなかった。統一的な全国支配を推し進める幕府と、それに抵抗する奈良町寺社勢力の二つの力の相克の間から、近世都市としての奈良町が生まれてゆく姿が、この過程の中でみることができよう。<sup>14)</sup>

結局、幕府中央から派遣された三代目奈良奉行土屋利次の失脚は、自らの何らかの過怠があったにせよ、奈良町を実

効支配する寺社勢力に跳ね出されたとも言えるのである。西鶴の頃、中坊氏三代の約六十年以上にも及ぶ支配から脱却しつつあったとしても、寺社勢力による奈良町支配は依然統いており、奈良町の実態を知る人々には、奈良奉行の「裁き」に興福寺（春日大社もほぼ支配下であった）との癒着が働いたとしても何ら不思議はないものとして分かち合われていた認識だったのではあるまいか。さらに言えば、奈良町支配には「統一的な全国支配を推し進める幕府」とそれに抗う危険な存在としての寺社勢力があり、「二つの力の相克」に戸惑う奈良町の人々の姿がそこにあり、彼らの「日常」は恐怖に近い感慨とともにあったのではなからうか。

その事実を作者西鶴が同時代を生きた読者たちに、東大寺と興福寺の太鼓の争奪戦として面白おかしく供覧したとすれば、序文の「これをおもふに、人はげけもの、世にない物はなし」に繋がる「人はげけもの」という奇談集『西鶴諸国ばなし』の「巻頭」に据えるにふさわしく、やはり西鶴の俳諧師としての手法が光っているのである。

これは唐突な手法ではなく、時事社会に関する西鶴の視点は、徳川五代將軍徳川綱吉の孝道奨励政策にすばやく反応し、孝道書『二十凶孝』をもじった『本朝二十不孝』〔貞享三（一六八六）年刊。五卷五冊、二十話〕の存在が知られるが、『西鶴諸国ばなし』巻一の七「狐四天王」においても、姫路の「於佐賀部狐」の米商人への復讐譚を装いながら、当時あくどい米商人として取り締まられた姫路の網干衆を想起させることでも確認できる<sup>54)</sup>。

ところで管見ではかかる「唐太鼓」が東大寺に保管されていた史料を見つけれない。しかし、仮に東大寺にこの太鼓が保管されていたとすれば、本来の縁起が「大織冠」こと藤原鎌足に絡む説話であることから、興福寺に保管されるべきではなかったか。それが東大寺にあるという設定で読み始めてしまったところに可笑しみはあり、それは西鶴の韜晦性にはめられた戯作世界の遊びと言えるのではなからうか。

## 四、西鶴浮世草子と奈良観光ブーム

西鶴の活躍期は俳諧活動を含めて寛文年間終りより延宝・天和・貞享・元禄年間初めとなる。この頃、なぜか奈良は観光ブームを迎えている。主に僧侶相手であった奈良町の木辻遊廓が広く知られ始めたこともあるが、相次ぐ奈良地誌の出版が要因の一つと言える。永島福太郎氏は、

ともかく奈良に見物客が多くなつた。その見物の枝折としての社寺案内書や地図も発刊された。古代にもすぐれた巡礼記があったが、中世でも『七大寺巡礼記』や『諸寺縁起集』がある。それを近世に模したものがまず、寛文六（一六六六）年の『和州寺社記』三巻である。これは名所和歌を添えている。これを敷衍したのが林宗甫撰の『大和名所記』〔延宝九（一六八一）年刊〕二十巻である。奈良町だけのものでは寛文五（一六六五）年に南都地図の開版があり、延宝三年に村井道弘らの『南都名所集』十巻が見え、次いで同六年に『奈良名所八重桜』十二巻が江戸の大久保秀興と奈良の本林伊祐の共著として刊行された。その挿図は菱川師宣の筆かといわれるものである。

と奈良の地誌出版ブームを指摘した上で、さらにその要因について、

寛文・延宝の交に、奈良・大和の案内書の類の著作がはじまるし、質量ともにすぐれたものができた。文運復興の一斑だといえようが、ともかく奈良見物がさかんだったということなる。それは新興都市大坂がようやく落ち着き、その町人らが古都見物をはじめたことによるのだろう。さらに京坂に公私の用で上京してきた武士や商人らを誘つたものともいえよう。案内書はこの種の人々にむしろ珍重されたと思われる。大坂町人の遊山が奈良町を潤したといえる。

と述べている<sup>60</sup>。当時の大坂の人々にとつて、奈良は耳目を集めていた場所であつたのである。それをさらに全国まで広げたのは西鶴ではなかつたらうか。西鶴の浮世草子に奈良を題材とした話は他の地域に比して多い。

『西鶴諸国ばなし』の中だけでも、巻二の三「水筋の抜け道」は若狭の小浜で身を投げた女性の遺体が、東大寺二月堂の「お水取り」の水脈を通つて、奈良秋篠の里の水路に吹き上げられた話をあげ、巻二の四「残る物とて金の鍋」では、大坂平野の綿買い商人が奈良から帰る際の仙人との邂逅の話、巻三の六「八畳敷の蓮の葉」では奈良吉野での話をあげ、巻五の一「灯挑に朝顔」では南都東町での朝顔の茶会の挿話をあげている。

『西鶴諸国ばなし』同様の諸国奇談話『懐視』「貞享四（一六八七）年刊。五卷五冊、二十五話」巻三の四「枕は残る曙の縁」には、南都三条の晒屋の美男が、何事も叶えてくれるという二月堂に参詣して言い寄られている女性との縁を断つてほしいとお願ひした。時を同じくして、南都花園町の美女が一方的に懸想されている男との縁を切つて欲しいと願をかけていたが、二人は各々満願の日を迎えて不思議があり、この美男・美女は夫婦となつたという話をあげている。

廻つて西鶴浮世草子の嚆矢『好色一代男』「天和二（一六八二）年刊。八卷八冊、五十四話」には、巻二の一「はにふの寝道具」で主人公世之介が奈良桜井の陰間茶屋の話をあげ、巻二の四「誓紙のうるし判」では世之介が父に商売の道への修行の場として奈良に行かされたものの遊女と懇ろになる話をあげている。特に後者は奈良の「名所尽くし」と言つてもよい。

「奈良坂や、このたびはさらし布調へて、越中・越前の雪国に夏をしらすべし。商売の道をしらでは」と、春日の里に秤目しるよしして、三条通の間丸に着きて、けふは若草山のしげりを詠め、暮れてはひかりあるむしの飛火野、いま幾日過ぎて京にかへるも惜しまれ、その比は卯月十二日、十三鐘のむかしをさくに哀れ、今も鹿ころせし人はその科を赦さず、大がきをまはすとかや。人のおそるるをわきまへて、山は山、野は又さらに

町にかけりて、おのがさまさま妻なるも笑しくて、なほ秋の半おもひやられ侍る。

これはやはり、右の奈良觀光ブームを意識してのことではなからうか。他にも『武家義理物語』〔元禄元（一六八八）年刊。六卷六冊、二十七章二十六話〕巻四の一「成ほどかるひ縁組」には大和郡山の武士の敵討ちの話『日本永代蔵』〔元禄元（一六八八）年刊。六卷六冊、三十話〕巻一の四「世は欲の入れ札仕合」には、かつては栄えた晒屋の松屋の未亡人が貧しく借金を抱える中で頼母子講で再び金持ちになる話をあげている。西鶴の遺稿集『西鶴置土産』『西鶴俗つれづれ』や他の西鶴作品にも部分的に奈良が登場するものは枚挙にいとまがない。

その中でも『世間胸算用』〔元禄五（一六九二）年刊。五卷五冊、二十話〕は正月を前にした大晦日という一年の総決算の日に焦点を絞り、金銭の工面に苦勞する人々の悲喜こもこもの町人生活の姿を描いた作品として評価が高いが、巻四の二「奈良の庭籠」に登場する男の姿は、当時、大坂と奈良町を往来して活きる「奈良通い」の商人の表徴と豊かな奈良町の人々をうまく描き出している。何よりも、表題の「庭籠」という語自体、「昔、一月一日から三日までの間、入口の土間に新しいかまどを築いて火をたき、家中の者や奉公人たちが集まり、餅や酒を飲食して遊んだ正月の行事。奈良地方の風習。庭いろり。」（『日本国語大辞典』）とあるように奈良地方特有の正月風景なのである。

主人公「蛸売りの八助」は、大坂でもう二十四、五年も蛸売りとして「奈良通い」で生計を立てている一見律儀な商人である。それなりに一所懸命に働いて家族を支えているものの、年を越すのがやつとで蓄財すらない。そのため、金銭のやりとりには厳しく、母親に頼まれて火桶を買ってくる時も手間賃をとり、産婆を呼んできて欲しいと頼まれても他人の頼みとは言え、振る舞いの茶漬けを食してからでないと腰をあげず、念仏講の人に奈良晒を買って欲しいと頼まれても宗教事と遠慮せずこれも手間賃をとる強欲な男であった。しかもこの男は、蛸の足は八本あるのに、長年、一本切って七本の足にごまかして売り、切った一本の足は「奈良通い」で通る道中の大坂松原の煮売り屋で売って口銭を得ていたという罰当たり者であった。大坂で朝獲れた蛸を仕入れて、そのまま奈良まで運ば

昼過ぎ頃になるが、その頃まで蛸は生きていて足の複雑な動きで騙しおせたのであろう。

ある大晦日、奈良の人々は「庭竈」や正月備えもあつて気ぜわしく働いているが、そこにつけ込み、足を二本切つて売つていた。それを偶々、大晦日にのんびりと碁を打つていた老人に見つかり、それからは奈良町中から「足きり八助」と呼ばれて信用を失くし、生業を失つたという笑話である。

西鶴はこの話の後半にわざわざ京都・大坂とは違ふ奈良町の正月風景をあげている。

されば大年の夜の有様も、京・大坂よりは格別しづかにして、よろづの買ひがかりも、あるほどは随分すまし、「この節季にはならぬ」とことはいへば、掛取聞きとどけて、二度来る事なく、差引四つ切に奈良中が仕舞うて、はや正月の心、家々に庭囲炉裏とて、釜かけて、焼火して、庭に敷物して、その家内、旦那も下人もひとつに楽居して、不断の居間は明け置きて、所ならはしとて、輪に入れたる丸餅を庭火にて焼き食ふも、いやしからず、ふくさなり。さてまた、都の外の宿の者といふ男ども、大乘院御門跡の家来因幡といへる人の許にて、例にまかせて祝ひはじめ、「富々、富々」といひて町中をかけ回れば、家ごとに餅に銭そへてとらせける。これを思ふに、大坂などにて厄はらひに同じ。やうやう夜も明がたの元日に、「俵むかへ俵むかへ」と売りけるは、板にをしたる大黒殿なり。二日の明けほのに、「惠美酒むかへ」と売りける。三日の明方に、「毘沙門むかへ」とうりける。毎朝三日が間、福の神をうるぞかし。さて元日の礼儀、世間の事はさし置きて、まづ春日大明神へ参詣いたすに、一家一門、すゑずゑの親類までも引きつれて、ござめきける。この時、一門のひろきほど、外間に見えける。何国にても、富貴人こそうらやましけれ。

これは、『西鶴諸国ばなし』巻一の一の「狭い世界しかしらない人には知り得ない奇談」と同様、京・大坂から距離的には極めて近い奈良の風俗の特殊性を広く読者に知らしめようとする、西鶴の創作意図が感得できるのである。

## 五、おわりに代えて―「俳諧師西鶴」―

この頃、奈良の観光ブーム同様に、奈良では俳諧ブームが起こっている。『奈良市史』には、

俳諧の分野では奈良はやはり一つの中心であった。近世初期の俳諧といえ、松永貞徳の流派すなわち貞門の俳諧であるが、とくに大和に大きな影響を及ぼしたのは、その門人松江重頼であろう。重頼は維舟と号し延宝八（一六八〇）年に没した。京都の旅宿業者で大文字屋治右衛門といい、貞門七俳仙の一人といわれ、名著『毛吹草』を著している。大和ではそのころ郡山藩士であった池田正式が貞門で知られたが、重頼と対立したといわれている。

〔表Ⅱ〕『統大和巡礼集』全5巻のうち奈良俳諧師 寛文12年6月 荒川宗長板行

貞則	次好	15	尹長	廣経	1
友久	好久	36	光光	吉満	2
仲品	久品	2	瀬貞	躬躬	2
友行	品行	6	宗宗	玕重	1
光順	行順	1	宗宗	重直	5
羨計	計勝	23	知重	元全	2
隆勝	勝貞	4	重一	政利	1
一柳	以俊	27	忠正	重弘	3
正古	處忍	1	友道	柳躬	2
祐頼	満知	20	道似	躬重	1
頼宗	芳政	1	定則	重応	1
宗長	政人	5	清一	筍竹	1
宗豊	冬俊	7	似休	意重	2
宗清	次居	14	知古	桶種	2
藪守	次治	6	守由	近雲	1
忠貞	親重	2	快清	庭	1
乘玄	好直	7	堯 <small>（虫損）</small>	不知作者	1
知貞	直之	1			1
貞利	永	2			1
		1			

数字は句数

（『奈良市史』p318より）

さて南都については、寛永十九（一六四二）年刊行の『鷹筑波』に南都清右衛門定之の句があり、正保四（一六四七）年刊行の重頼の『毛吹草追加』に南都之住として宗料の句が五句収められている。その一句に  
かん鍋のつるにもなるや蒲萄酒

がある。定之または宗軒がどういう人であるかについては、まだ明らかではないが、宗軒はあるいは僧侶かともいわれる。しかしこのころから延宝のころ（一六七〇年代）にかけて多数出された俳諧の撰集には、南都の俳人の作が相当数あげられているので、奈良ではかなりこれが流行していたと思われる。そうした雰囲気は郡山の岡村正辰の『大和巡礼集』『続大和巡礼集』ともなったのであろう。

いま試みに『続大和巡礼集』によってその中に名をつらねている俳人を整理してみると、つぎのようになる。句数一九四五、作者四九九人、そのうち南都の俳人は約六〇人に及び、当時の奈良の俳諧人口の大きさを示している。<sup>57</sup>

本論考著者森田は、科研課題として長らく蕉門確立までの奈良俳壇の人々と西鶴の関係を調べているが、談林俳諧全盛期の延宝年間から蕉門確立期（一六七三～一七〇二）における時期だけでも奈良俳壇のべ俳人数は二百七十名を数えている。調査途次であるため、まだ増えるであろうが、右の『続大和巡礼集』の例に見るように、奈良の俳人は全国の地方俳壇に比してもかなり多い<sup>58</sup>。奈良は俳諧ブームだったのである。

西鶴との関係で絞るなら、著名な俳人としては池西言水（一六五〇～一七二二）や奈良俳壇と関わりが深かった小西来山（一六五四～一七一六）、椎本才磨（一六五六～一七三八）等々があるが、奈良町という意味では『西鶴名残の友』『元禄十二（一六九九）年刊。五卷五冊、二十七話』巻四の五「何ともしれぬ京の杉重」に名を連ねる「大隅但馬」「西流」「西任」たちにも目を向けるべきであろう。彼らは西鶴を南都の八重桜を誘ったにもかからず、今年も八重桜の季節に来てくれなかったと、「南都諸白」という上等な樽酒をはるばる送ってきてくれたのである。下戸

の西鶴は嬉しくなかったが、居合わせた座中の者たちに「呑まぬを知りて、この気の付所、当流の作意」と言つて、皆、高笑いしたというエピソードを入れている。

この「当流の作意」とは談林俳諧流とも西鶴流とも解釈できる。残念ながら、彼らは未詳であるものの、西鶴にとつて奈良町には強力な談林俳諧の、あるいは西鶴の門人たちがいたという事になる。

思えば、彼らは『西鶴諸国ばなし』巻一の一の東大寺と興福寺の一件の情報提供者かも知れない。また、彼らは西鶴浮世草子に書かれた奈良の題材の提供者かも知れない。そう考えれば、西鶴浮世草子全話も全国に各々提供者がいて成立した作品の可能性がある。それは言わば、俳諧のネットワークであるが、「俳諧師西鶴」を頂点とする西鶴門流のグループかも知れないのである。

西鶴浮世草子は、『西鶴諸国ばなし』に限らず、その殆んどが全国からの話の種による「諸国咄」形式である。

これは西鶴が諸国に拡がる俳人ネットワークから寄せられた情報をもとに、浮世草子の各話を作成していた可能性は高い。各作品が上梓されることによって、地方談林俳壇の人々へのお礼となるわけであるが、これを俳諧の手法の一つと考え、浮世草子を俳諧の「巻」と見立てれば、「挨拶」にあたるのではなからうか。『俳文学大辞典』（角川書店）には、「挨拶」を連歌俳諧用語として、「相手に対する親和の意を込めて句を詠むこと。問答・相聞・贈答など、日本の詩歌は対詠・唱和的性格を核として発生・展開してきたが、それを最も典型的に示すものが、座の文芸としての連歌・俳諧である。」と立項している。極論すれば、西鶴の目指したものは浮世草子という形式を用いた座の文学ではなかったか。さすれば、浮世草子作家西鶴は「俳諧師西鶴」の姿そのままであったのである。まだまだ空中楼阁のような話であるが、『西鶴諸国ばなし』巻一の一を端緒として西鶴と地方談林俳壇の関係について、一つ一つ調べていくことを今後の課題としたい。

- 注
- (1) 宮澤照恵著『西鶴諸国ばなし』の研究（和泉書院）二〇一五年刊。
  - (2) 西鶴研究会編『西鶴諸国はなし』（三弥井古典文庫）二〇〇九年刊、巻一の「担当有働裕氏解説より」。
  - (3) 拙稿「『西鶴諸国はなし』試論——「人はばけもの」論——」（『日本文芸研究』第五十一巻三号（関西学院大学日本文学会）一九九九年十二月。後に単著『西鶴浮世草子の展開』（和泉書院）二〇〇六年刊の「第二部」「第二節」に所収。
  - (4) 西尾知己「東大寺・興福寺の抗争と室町殿政権」（『室町時代の東大寺』ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第十九郷（東大寺）二〇二二年刊 八一—八二頁。
  - (5) 拙稿「『西鶴諸国はなし』の余白——その序文からの読みをめぐる——」（『日本文芸研究』第五十巻四号（関西学院大学日本文学会）一九九九年三月。後に単著『西鶴浮世草子の展開』（和泉書院）二〇〇六年刊の「第二部」「第一節」に所収。
  - (6) 『奈良市史 通史三』第一章 奈良町の成立 第三節 寺社領と大名領 「寺社の朱印地」（吉川弘文館）一九八八年刊 七〇—七一頁。
  - (7) 西山厚「公慶上人の生涯」（『近世の奈良・東大寺』ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集第四号（東大寺）二〇〇六年刊 九八—一〇五頁。
  - (8) 『法相宗総本山興福寺』「興福寺について」 「興福寺の歴史」 <https://www.kohfukuji.com/about/history/>
  - (9) 頭注担当は宗政五十緒氏。井上敏幸氏は春日大社所蔵の鼈太鼓（だだいこ）には裏に「東大寺」の文字があり、毎年春日若宮の祭事に用いられたことも関係がある、としている。「対訳西鶴全集 西鶴諸国ばなし・懐視」（明治書院）巻一の「補注による」。
  - (10) 筒井寛昭・梶谷亮治・坂東俊彦著『東大寺の歴史』（東京美術）二〇一九年刊 五一頁。
  - (11) 平岡定海著『東大寺辞典』（東京堂出版）一九九五年刊 四五—五頁。
  - (12) 『奈良市史通史三』第一章 奈良町の成立 第二節 奈良町の形成とその支配 「奈良奉行」四四頁。
  - (13) 注(12)に同じ。四八頁。
  - (14) 注(12)に同じ。四九頁。
  - (15) 西鶴研究会編『西鶴諸国はなし』（三弥井古典文庫）二〇〇九年刊、巻一の七 担当森田解説より。
  - (16) 永島福太郎著『奈良』「VI のどかな奈良町」「一 奈良見物」（吉川弘文館）一九六三年刊 二七—二七三頁。

- (17) 奈良市史『通史三』第四章 奈良の近世文化 第二節 近世文化の諸相「俳諧の盛衰」三八〇頁。
- (18) 森田雅也代表、科研基盤研究（C）「地方談林俳諧文化圏の発展と消長―西鶴の諸国話的方法との関係から―課題番号 24520252」期間：2012年度～2016年度、「上方文壇と地方談林俳諧文化圏との繋属関係の研究―海川・物流網を視座として―」（課題番号 17K02480）期間：2017年度～2021年度」及び「17世紀における大坂俳壇と地方物流網の紐帯関係―西鶴との交流を視座として―」（課題番号 22K00309）期間：2022年度～2026年度」の調査データによる。調査データは現在のべ一万三千名余名となるが、それらのデータを地図に落とし込み、その一部をホームページ「森田雅也研究室」17世紀後半の俳諧文化圏」(<http://saikaku48.jp/hakka.html>) として公開している。

※本文中の西鶴作品に関するテキストは『日本古典文学全集 井原西鶴（1）～（4）』（小学館）を用いている。

奈良町に関する資料調査に際し、奈良市立史料保存館で調査したが、当館の池田富貴子氏より貴重な参考資料を多く閲覧させていただいた。記して感謝としたい。

なお、本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）森田雅也代表「17世紀における大坂俳壇と地方物流網の紐帯関係―西鶴との交流を視座として―」（課題番号 22K00309）期間：2022年度～2026年度」として助成を受けている。